

★11/14 糖尿病デー

11月14日は「世界糖尿病デー」です。
 糖尿病デー当日、当院6階会議室にて市民の皆様を対象とした「糖尿病教室」を開催いたしました。
 医師の話から始まり、糖尿病療養指導士を始めとした各スタッフの話聞いて頂きました。
 理学療法士による話の際には、参加者とスタッフが輪になって運動療法を行い楽しい学びの会となりました。
 多くの市民の皆様にお集まりいただきありがとうございました。



★12/25 院内クリスマスコンサート

12月25日、12:00から当院井上医師主催によるクリスマスコンサートを院内1階受付ロビーにて開催いたしました。1時間ほどの短い時間でしたが、生演奏の美しい音色に耳を傾けていただき盛大な拍手で閉演となりました。多くの市民の皆様にお集まりいただきありがとうございました。



◆出演者
 森清 奏子 (Hp.)
 市川 天音 (Vn.)
 酒井 美羽 (Vn.)
 都築 美奈 (Vn.)
 中村 康太郎 (Vn.)
 井上 優汰 (Vla.)
 伊藤 祐三郎 (Vo.)
 今村 菜由 (Vo.)
 石田 麻美 (Pf.)

◆プログラム
 1. All I want for Christmas is you
 2. Greensleeves
 3. For the first time in forever, Let it go
 4. HANABI
 5. A Christmas Festival



当院 井上医師 (左から6人目)
 当院 石田看護師 (左から9人目)

発行：郡上市民病院
 〒501-4222 岐阜県郡上市八幡町島谷1261番地
 TEL 0575 (67) 1611 FAX 0575 (67) 0470・(65) 6005
 home page <http://www.gujo-hospital.jp>

※外来担当医表はこちらを参照下さい→



和

(やわらぎ)

第45号
 郡上市民病院
 広報誌
 2024年1月



病院理念

地域で信頼され 心が癒される病院を 目指します

***** 基本方針 *****

- ・ 医の倫理を守り、安全な医療を提供します。
- ・ 二次救急医療を充実させ、地域医療に尽くします。
- ・ 病病連携、病診連携を推進し地域医療に努めます。
- ・ 新しい知識や技術を導入し患者様に還元します。
- ・ 患者様の苦痛や不安を和らげる環境作りをします。

年頭のご挨拶

病院長 片桐 義文



片桐院長と外来スタッフ

新年あけましておめでとうございます。

コロナ感染症が5類になって、ようやく日常生活が戻ってきた感じがします。しかし、感染はまだまだ続いており、インフルエンザ等も流行しているため、市民病院では、感染対策の徹底及び面会制限（面会の予約制）を行っていますので皆様にはご協力のほどよろしくお願いいたします。

以前のように自由になり、外国人観光客も増え、対面での研修会、歓送迎会などもほぼ解禁されました。感染症

に対して最大7回まで接種したコロナワクチンは公費負担でしたが、今年度からはインフルエンザと同様に自費負担となります。また都道府県ごとにコロナ感染に対応する病床を確保していましたが、5類になってからは入院が必要な場合でも、一般病棟で治療する感染症として取り扱われるようになっていきます。

郡上市民病院はコロナ感染病床を確保するために療養型病床の閉鎖で対応していましたが、5類に移行し経過期間がすぎた2023年12月に閉鎖していた医療型療養病床を再開させていただきました。この数年で郡上市内の病床が減少し、医療が必要で、在宅や施設で管理できない患者様は、市外の施設などをお願いしてきました。今後は市民病院の役割として、こういった患者様を受け入れる体制を構築していきます。急性期医療に関しては、コロナ流行期に一度入院制限を行いました。救急一般診療は制限せずに行っています。

今年度は6年に一度の診療報酬と介護報酬と福祉サービス報酬の同時改定が行われる年になります。2040年頃に日本の高齢者（65歳以上）人口の割合の最大化と、生産年齢人口の急減が同時進行で起こり、経済や社会維持が危機的状況に陥るとされます。この労働人口が減り、高齢者が増える問題に対して、今から準備していく必要があるため、国が医療介護福祉に対してどのように対応してくかの方針の改定が行われます。市民病院は、コロナに対してもそうであったように、変化していく医療状況に対応し、地域で信頼される病院を目指して、本年も住民の皆様へ、健康と安心を提供できるように職員一同邁進してまいります。

今年の干支は「甲辰（きのえ・たつ）」で、春の暖かい日差しが大地すべてのものに平等に降り注ぎ、急速な成長と変化を誘う年とのこと。2024年はパリオリンピックが開催され日本人の活躍や、野球の大谷選手がドジャースでの活躍が期待されるなど明るい話題も多くなると思います。ポスト・コロナで新しい社会が、活気あふれる年になるように祈願しております。

赤ちゃんにやさしい病院を目指して



母乳育児支援チームの助産師

当院では、年1回、様々な部署で取り組んだ改善活動について、その成果を全職員の投票で評価する「医療の質向上活動報告会」があり、私達の取り組みが最優秀賞である「金賞」を受賞しました。

当院は、岐阜県内で2つあるBFH(Baby Friendly Hospital)認定病院（赤ちゃんに優しい病院）です。BFH認定病院とは、WHOとユニセフが、世界の全ての国の産科施設に対し「母乳育児を成功させるための10カ条」を守ることを呼びかけ、その方針を採用・実践する産科施設を「赤ちゃんにやさしい病院」に認定するものです。

「母乳育児を成功させるための10カ条」に基づき授乳支援を行っている「母乳育児支援チーム」の活動ですが、ここ数年、妊婦の高齢化や、コロナ禍における母親の精神不安の著明化などにより、母乳率（退院時・育児指導時・1ヶ月健診時）が低下しつつあることが課題となっていました。チームでは、母乳育児を継続してもらうためには、どのような活動を行えば母乳率の向上に繋がるかについて協議を重ねる過程で、助産師自身が「楽しく自信を持って授乳支援を行うこと」が重要であるとのコンセンサスに至り、新たな視点で活動に取り組む方針を定めました。

具体的には、「助産師へのアンケートを実施・集計し、自信が持てなかった事例や状況をチーム会で共有する」「授乳支援方法を標準化したフローチャートや、産後2時間以内用のワードパレットを作成できる」「分娩後の全ての母親を対象に、新たに作成したワードパレットを用いて電話訪問を実践する」「授乳についての気持ちを確認するフェイススケールを母親の自己申告に基づき確認する手法で統一する」などの活動を通じて、助産師が情報共有できる新しい仕組みづくりを行うことで「自信をもって楽しく支援できる体制づくり」の構築を図ってきました。母乳率は横ばいではありましたが、この活動を通じて助産師の満足度が高まり、併せて、母親も良い精神状態で母乳育児ができていることが確認でき、その相乗効果で、私達自身が当初目標に掲げた「楽しく自信を持って授乳支援を行うこと」が実践できるようになりました。

「母乳育児支援チーム」は、母親も、それを支援する助産師も、楽しく自信をもって母乳育児を成功させる様々な取り組み・活動を通じて、今後も引き続き「赤ちゃんにやさしい病院」としての医療の質の向上を図っていきます。ご理解、ご支援、よろしくお願いいたします。